

ルカの福音書 19 章の前段はたとえ話で、10 人のしもべに 10 ミナを与えて、王位を得るために旅をし、帰って来た時にそのしもべたちの動向を尋ねるという話から学びました。

1. ふたりの弟子にイエスが命じたこと (28～31 節)

- ①エルサレムに向け (28)「これらのことを話して後、イエスは、さらに進んで、エルサレムへと上って行かれた。」

それらの出来事や話が終わった後、いよいよイエスはエルサレムへの道進むことになります。それが目ざす地であり、そもそもイエスがこの地上にいられた目的を果たす場所でありました。エリコはエルサレムから約 30 キロ。この上ってゆかれたという表現のなかに、20 キロ以上の動きがあることが次節からわかります。

- ②つないであるろばの子 (29～30)「オリーブという山のふもとのベテパゲとベタニヤに近づかれたとき、イエスはふたりの弟子を使いに出して、言われた。『向こうの村に行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない、ろばの子がつかないであるのに気がつくでしょう。それをほどこいて連れてきなさい。』

オリーブ山はエルサレムの東にあり、標高 800 メートルほどの四つの山から成っています。イエスにとっては祈りの場所でもありました。その山のふもとにあったベテパゲとベタニヤはのなかの、ベタニヤはエルサレムから 3 キロほどの町でマルタとマリヤが住んでいた町です。イエスは二人の弟子をこれらの所に遣わし、だれも乗ったことなく、つながれているろばの子のひもをほどこいて、連れて来なさいと命ぜられたのです。

- ③主がお入用 (31)「もし、『なぜ、ほどこのか』と尋ねる人があったら、こう言いなさい。『主がお入用なのです。』」

ろばの所有者は、「なぜ、ほどこのか」と尋ねることになるでしょう。その時には、「主がお入用なのです」と言いなさいと言うのです。その権威のあるお言葉を、弟子達は取り次ぐことを命ぜられたのです。

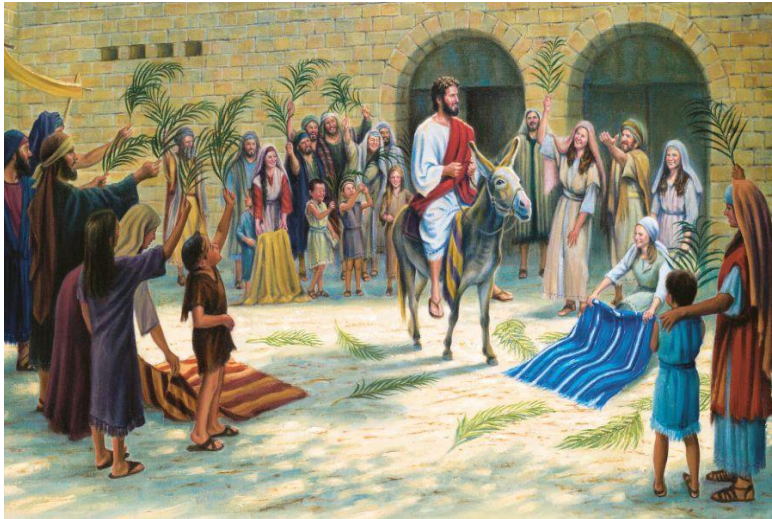
2. ろばの子が連れて来られ (32～36 節)

- ①イエスが話されたとおりに (32)「使いに出されたふたりが行って見ると、イエスが話されたとおりであった。」

使いに出されたふたりの弟子が向こうの村に行ってみると、イエスが言われたように、まだ乗ったことのないろばの子がつかがれていました。

- ②なぜほどこのか (33～34)「彼らがろばの子をほどこいていると、その持ち主が、『なぜ、このろばの子をほどこのか』と彼らに言った。弟子たちは、『主がお入用なのです』と言った。

ふたりの弟子は、イエスの言われた通りでしたから、許可も得ずに、つないであるろばの子をほどこき始めました。すると、当然のことながら、「なぜろばの子をほどこのか」と所有者と思われる人が言います。要するに無断で



どうして?というところです。すると、彼らは言われた通りあの言葉を伝えます。「主がお入用なのです。」。

- ③ろばにイエスをお乗せし (35~36)「そしてふたりは、それをイエスのもとに連れて来た。そして、そのろばの子の上に自分たちの上着を敷いて、イエスをお乗せした。イエスが進んで行かれると、人々は道に自分たちの上着を敷いた。」

その権威ある言葉で、ろばの所有者は納得しました。そこで、ふたりの弟子はろばの子をイエスのもとに連れてきました。その上で、自分たちの上着をろばの上に敷き、イエスに乗っていただきました。事はピタッとイエスが言われたように進んできました。イエスはこのろばの子に乗ってエルサレムに入城されるのです。だからこそ、王を迎えるかのようにして、人々は道に自分達の上着を敷いたのです。

3. 弟子達の賛美とパリサイ人の抗議 (37~40 節)

- ①群れはみな賛美し (37)「イエスがすでにオリブ山のふもとに近づかれたとき、弟子たちの群れはみな、自分たちの見たすべての力あるわざのことで、喜んで大声に神を賛美しはじめ、」

エルサレムを目前にした、オリブ山のふもとで、弟子達の群れは、イエス・キリストがなしてこられた、奇跡、癒しなどの御業を覚えて、神を賛美したのです。それは、直前のろばの子の出来事に触発されたことは言うまでもありません。彼らの賛美は大きな声でした。なぜかと言うならば、彼らは喜んでいたので。何を喜んでいたかと言えば、ろばの子に乗って、今やエルサレム入場するお姿は、ゼカリヤ書 9:9 で預言されている通りであったからです。

- ②祝福の賛美 (38)「こう言った。『祝福あれ。主の御名によって来られる王に。天には平和。栄光は、いと高き所に。』」

賛美の内容はこうでした。「祝福あれ。主の御名によって来られる王に。天には平和。栄光は、いと高き所に。」。これは詩篇 118 篇 26 節に基づく賛美の言葉でした。「来られる人に」が「来られる王に」となっていますがイエスを王の王としてあがめているのです。後半分はルカ 2 章のキリスト誕生時に御使いの軍勢が歌い上げた賛美と重なります。「地には平和」がここでは「天には平和」となっています。

- ③石が叫ぶ (39~40)「するとパリサイ人のうちのある者たちが、群衆の中から、イエスに向かって、『先生。お弟子たちをしかって下さい。』と言った。イエスは答えて言われた。『わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。』」

この弟子達の大声の賛美について、パリサイ人のある者が、群衆の中で声をあげました。「先生。お弟子たちを叱ってください。」。イエスが崇められることへの反発でしたが、イエスは「この人たちが黙ったとしても、石が叫びます」と言われました。人の口を封じたとしても、イエスがキリスト(救い主)であることを、隠すことはできないと言われているのです。

《結論》

今朝の聖書箇所から三つのことを学んでいきたいと思います。

第一は、イエス・キリストの物事を予知する力についてです。私たちはイエスの御力については、これまでも色々と学んできました。今朝の箇所では、イエスが、「向こうの村に行くと、ろばの子が見つないであるから、連れて来なさい」とふたりの弟子に命ぜられました。つまり、イエスには向こうにいるろばの子の姿が、見えていたのです。それでは、イエス・キリストとはどういうお方ですか。お伝えしてきているように、イエスは完全な人間でしたが、完全な神なる方でした。一人格のうちに、人の性質と神の性質を、合わせもっておられたのです。神学的に言うと、二性一人格のお方なのです。だからこそ、イエスには向こうの村にいるろばの子の姿が見えていたのです。また、派遣されるふたりの弟子とろばの子の所有者と思われる人とのやり取りについても予知することができたのです。あなたが、イエス・キリストを信じているのなら、この方は今日の私たちの教会の歩みや個人個人の歩みについても予知してくださっているのです。それは知らされないことも多いです。だからこそ、この方を信じ、この方に委ねていきましょう。きっと祝福されます。

第二に、イエス・キリストのお言葉の権威についてです。イエスはふたりの弟子にろばの子を連れて来なさいと命ぜられました。その時に、ろばの子の所有者が「どうしてろばの子をほどくのか」と問うならば、その時には「主がお入用なのです」と言いなさいと命ぜられました。ふたりの弟子は実際、言われた通りのことが起きた時に、「主がお入用なのです」と伝え、その所有者は、疑いもせずに、そのろばの子をほどくのを許しているのです。そこには、イエス・キリストの言葉の権威というものをみます。盲人に「わたしに何をしてほしいのか」と尋ねられたときに、「主よ。見えるようになることです」と伝え、イエスは「見えるようになれ」と言われると、盲人は開眼したのです(18:35以下)。イエスのお言葉には権威と力があつたのです。今日であっても、聖書のお言葉には権威があつて力があります。聖書の御言葉の力を信じて、読んでいきましょう。

第三に、三位一体なる神を賛美することについてです。弟子達はイエスと出会ってから、ずっとイエスと共にいました。その教えを聞き、また癒しや奇跡も見てきました。そして、まさにこの方が「生ける神の子キリスト」であることを確信させられていました。今回のろばの子の事も、まさに神のなせるわざであることを思いました。ゼカリヤ書 9 章 9 節に「シオンの娘よ。大いに喜び。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜り、柔和で、ろばに乗られる。それも雌ろばの子ろばに」とあります。これら一連のことは旧約聖書に預言されていたことだったのです。だからこそ、彼らは主イエスを賛美したのです。その喜びは高まって、大きな声となり、神をほめたたえたのです。

あなたはイエスを神と信じますか。信じるなら、この方を高らかに賛美しましょう。そして、この方があなたに恵みをくださる主と確信させていただきましょう。